

東日本大震災における復興と「ボランティア」に関する現場研究

—岩手県九戸郡野田村のエスノグラフィー—

塩田 朋陽

本研究は、2011年3月11日に発災した東日本大震災の被災地である岩手県九戸郡野田村の復興への歩みと、その歩みに寄り添うべく活動を続けてきたボランティアの歩みを記述するエスノグラフィーを元に、ボランティアや外部支援者による支援について、その活動に存在する「揺らぎ」を〈支援〉と〈応援〉という枠組みにおいて整理し、外部支援者と被支援者との「関係」について検討することを目的としている。理論化には、グループ・ダイナミックスを用いる。

東日本大震災の発災後、被災地へは多くのボランティアが訪れたが、その一部では「被災者抜き」の支援に繋がりうるボランティアの一般化・標準化を生じるボランティアもいれば、「ケアの倫理」を根本に据えるボランティアもあり、ボランティアを総称的に語ろうとすると、対象と主体に揺らぎが生じることが確認された。本研究では「被災者」「支援者」の枠組みを〈支援〉、「〇〇さん」「△△さん」という枠組みを〈応援〉として示した。

筆者は、2011年4月の立ち上がりから、東日本大震災の被災地を支援する大阪大学災害ボランティアサークルすずらんを通じて継続的にフィールドワークを行った。また、2012年4月から2013年3月までは、岩手県九戸郡野田村の復興支援を行う団体間のネットワーク組織であるチーム北リアスの現地事務所事務局員として現地へ移り住み、さまざまな活動に関わらせていただいた。2013年4月からは大学に復学し、大阪と野田村を往復した。本研究のエスノグラフィーは、大阪大学災害ボランティアサークルすずらんやチーム北リアスを通じて行われた、野田村でのこうしたフィールドワークについて綴ったものである。

考察では、グループ・ダイナミックスの集合流概念により〈支援〉と〈応援〉という枠組みを整理し、この枠組みに沿ってエスノグラフィーを解釈した。野田村の求めるものが〈支援〉から〈応援〉に移行する場面、ボランティアが〈支援〉から〈応援〉に移行する場面、双方が〈応援〉から〈支援〉に移行する場面などを通し、〈支援〉、〈応援〉の枠組みを例証した上で、野田村とボランティアとの関わりが〈支援〉、〈応援〉の枠を移動するものであったこと、〈支援〉、〈応援〉の枠が併存、合流するものであったことを示した。さらに、〈応援〉の固着への危惧から〈支援〉と〈応援〉の選択肢を常に顕在化し、選び取れるようにしておくことの重要性が確認された。

最後に、こうした〈支援〉と〈応援〉の枠組みを共に顕在化させておくためのツールを提案した。援助者と被援助者が互いにその関係を意識し、評価し、選び取っていくことのできるツールを元に、〈支援〉や〈応援〉に固着化しない関係の、あり方の可能性が示された。(ボランティア行動学)